

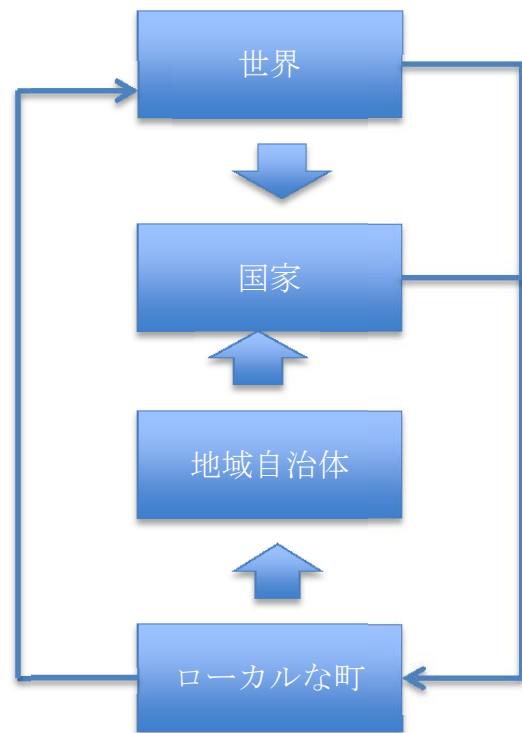
## 農業工学でできそうなセクター間の連携（部門間、分野間、Nexus）

について考えられることを述べよ。

農業工学ができることとして部門間の連携があると考え。部門とは、①ローカルな町、現地、②地域自治体、③国家、④世界のことである。ここの四つは、下から並んだ下の図のような構造として並んであり、矢印のようにいくつかの働きによって相互作用している。それぞれの作用に対して農業工学は貢献できると考えられている。まずローカルな村から地域自治体への作用について説明する。町人の意見が地域自治体に反映されるのがこの矢印であるが、農業工学は農家や地域との対話を通じて町人の意見をまとめ、よりよい形で地域自治体の政策に反映させることができると考える。

次に地域自治体から国家への作用であるが、これは農業工学が関わることは難しいことも多いが、地域自治体が国家に対して予算を請求したり国家の政策を考え直してもらったりすることである。

そしてローカルな町から世界への作用であるが、ここは農業工学が大きく活躍する場所である。ここでは世界レベルの条約、協定、基準制定の際に農業工学の人が報告書や論文の形で現地の状況を伝え、それに反映させるということである。この作用はローカルな町から直接世界に作用するという点で大きなものである。



世界から国家への作用は、国家間の条約などによるものであり、また世界からの条約などが国家の政策と混じってローカルな町に還元されることになる。

このように農業工学は回り回ってこの四つの部門を結ぶ鍵のような役割を果たすことができる。農業工学はこれまで示した矢印（作用）をより大きく、より効果的にすることができると考える。このことは立場の弱いローカルな町の人々の影響力を増すことと直結する。このような農業工学の参画によってより住みやすい町の実現に繋がるのではないだろうか。